

# 沈黙に向き合う

沖縄戦聞き取り47年

石原 昌家

(11)

## 文化

伊是名島虐殺事件は「いづれ誰かが究明するのを待つていた」という遺族の一人の全面的な協力を得て聞き取りを始めた。しかし案内をしてくれた遺族ともども追いつけなかったことがあった。1974年7月に伊是名島の諸見集落で聞き取りをしたDさんも証言を拒んだ一人だ。

沖縄の人絡んでいる「いまさらそんなこと調関係が大変なことになる。

事件を明らかにした仲田精昌さんの手記「島の風景」の出版激励会の案内

沖縄戦の事実は全部は出せないし、書く必要もないと話し、事件が蒸し返されることを恐れていた。Dさんが証言を拒絶するようになり、伊是名島で起きたことを把握するのは困難を極めた。Dさんが口にしてきた「沖縄の人も絡んでいるから」という理由こそ、この島虐殺事件も扱った「虐殺

### 伊是名島虐殺事件 ③

目撃「少年」が手記 伊是名島の人々が「タブー」としてきた

# 島の人が自身が本出版

## タブー破り出身者も歓迎

島で沖縄戦が語れない「タブー形成」の根源だった。しかし私はDさんの忠告に逆らう形で、聞き取りを進め、その内容を新聞に掲載した。このため元「調査一

はずの事件が脚光を浴びる出来事が起きた。伊是名の島人自身がその内容を明らかにしたのだ。長年学校教師を務めていた伊是名島出身の仲田精昌さんが「島の風景」(晩聲社)という題名の著作で虐殺事件の全容を公刊したのである。戦後日本が自らの戦争責任を明らかにしてい

てくれたのだ。私は一読するや、すぐにでも出版すべきだと思った。仲田さんはあどなごうべきだと思った。島人自身が「タブー」を打ち破り、地域における沖縄戦の総括の書として、また戦争責任の所在を明らかにした画期的な書として評価されることになった。すぐ後、Dさんの「人間関係が大変なことになる」という言葉が頭から離れないままだったからだ。島の人の関係に悪影響を引き起こしてしまっただけではないかとの罪悪感がつきまとい、自らは伊是名島へ足を運ぶことができないままだった。激励会は、島の人たちを高く評価し、島を挙げて激励する場だった。島にあって戦争を総括する集いでもあった。私は心底うれし気持ちになった。次回で元「調査」がなぜ、私に証言しようとしたのかについて、島人の仲田さん自身の言葉と私の聞き取り証言とを照合させながら明らかにしたい。(沖縄国際大学名誉教授) (次回はあす掲載)